

路
上
の
幸
福

弁護士中町公二の事件簿

弁護士中町公一の事件簿
ろじょう ことばくもの
路上の幸福者

一九九〇年 一月二五日 第二刷発行

著者 笹倉 明
ささくら あきら

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

一〇十番 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
出版部 (〇三) 二三〇一六二〇〇
販売部 (〇三) 二三〇一六三九三
電話 製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

兄妹のマリファナ

7

奇妙な盗品

35

始発の客

61

めいわく稼業

85

窃盗三題

113

目

次

路上の幸福者	かわき	隠れみの
--------	-----	------

197	171	145
-----	-----	-----

写真・装丁

神長文夫

弁護士中町公一の事件簿
路上の幸福者

兄妹のマリファナ

晩秋の夕暮間近、すっかり陽が落ちた後の濃い青空が新宿ランプの彼方にひろがっている。兄妹は、窓を閉めた。これから車のスピードを上げるに当って、窓から吹きこむ風の冷たさを予想したのだ。

「おい、ちょっと一本つくってみろ」

首都高速に乗ってギアをトップにすると、兄がうわついた調子でいった。

何だかドキドキするね、と助手席の妹はいいながら、一本の紙巻^{マイルド・セブン}き煙草をティッシュ・ペーパーの上でほぐしはじめる。

「うまくほぐして、中を空っぽにしろ」

「わかってるよ」

いった唇に笑みをためて、妹は親指と人差指をつかう。慎重にほぐして紙の筒だけにすると、こんどは、

「葉っぱをつぶして刻み煙草くらいにしろ」

兄が命じた。運転していても、隣の動きが気になって落ちつかない。妹は、ジャケツ

トの内ポケットから取り出したビニール・パックを裂いて少量をつまみ出し、膝の上に置いたもう一枚のティッシュに指でつぶしながら落としていく。

つぶし終えたところで、妹は再び兄に意見を乞う。

「ほぐした煙草を少し混ぜて、もと通りに詰めるんだ」

いわれたとおりにしようにするが、紙の筒が細いのと車が揺れるせいで、うまく入らない。しかも指先は器用なほうではないので、すぐに紙がよじれてしまうのだった。

下手だとなる兄に、だって、と妹は不満顔で言い訳をする。おにいちゃんだって、やったことないくせに、知ったかぶりして、まったく頼りないんだから。妹がぶつくさいつていると、あッ、と兄が唐突に声を上げた。

「どうしたの」

「逆だった！」

「何が」

「高速……。反対に乗ってしまった」

馬鹿、と妹がなじる。「こつちに氣をとられてばかりいるからよ。氣もそぞろなのよ、おにいちゃんは」

新宿ランプは、タクシーの運転手でも間違う人が多いのだが、外苑、三宅坂方面へし

か向えない。調布へ帰るには、少し先の初台ランプで乗らねばならないのだ。

次のランプでいったん出て、それから改めて反対車線に入ることにした。

「本当にもう、ドジなんだから」

妹はしかし、半ば笑っていた。びっくりさせられたけれど、たいへんな過ちをおかしたわけではない。

外苑ランプで高速を降りた。兄妹の不案内な街だ。しばらく走ると、位置が掴めなくなった。反対車線に乘ろうとして回りこんだつもりだったが、どこでどう間違えたのか、道は高速からどンドン離れていくようだ。国立競技場などの巨大な建物があるせいか、方角の感覚がまるで失われていた。

兄の額に汗が滲みはじめる。妹は、つくりかけの材料をティッシュにくるんでダッシュボードにしまいこんだ。いまはもう、一服試してみるどころの話ではなかった。あたりはライトを点けねばならないほど暗さを増していて、よけいにやっかいだった。二、三の人に尋ねてみたが、高速への道を答えられる者はいなかった。やむなく進む。とにかく走らせるほかはない。

あッ。兄が声を上げたとき、妹は今度こそ肝をつぶした。

「また、やっちゃった」

いって、溜息をつく。

「どうしたのよ」

「この道……」

「この道がどうしたの！」

妹が叫ぶように問い返した。

「一方通行だった」

げんなりした兄の声は、未だそれほど深刻ではない。が、妹はあせった。早くＵター
ンしなさいよ、と叱りつけるようにいう。それができる場所であればよかった。両側に
ビルが建てこんでいて、道幅も狭すぎる。兄は、バックするより突つきることを選んだ。
突然、車が急停車して、妹は前につんのめった。前方から車がやって来る。兄が蒼く
なって車を後退させはじめる。妹も声を失った。前方の車は、ぴたりと鼻先についてく
る。制服、制帽の二人がフロント・ガラスから無言の威圧を与えながら。

「おにいちゃんのドジは、もう一つあったんです」

と、妹はいった。兄とのやりとりをそのまま再現しながら、くったくのない調子で顛
末を話し続けて小一時間が経っている。

「免許証、家に忘れてきてたんですよ。もう！」

いかにも悔しげにいった後で、クツクツと掌で口を覆って笑いだす。

中町公一がこれまで接見した刑事被告人は数多いが、彼女ほど明るい、というより湿っぽさの感じられない人間は記憶になかった。二十歳になって間もない俳優養成の専門学校生で、共犯の一つ年上の実兄とは部屋をシェアするほど仲がよい。埼玉県北部の親元を離れて、学校に近い（兄は会社に至近の）調布に二間ふたのアパートを借りて暮していた。

起訴状には、次のようにある。

〔公訴事実〕

被告人両名は、共謀の上、法定の除外事由がないのに、昭和六二年一月二日、東京都渋谷区千駄ヶ谷×丁目×番地警視庁×警察署において、大麻を含有する植物細片約六・四七六グラムを所持したものである。

罰条 大麻取締法 第二四条の二第一号、第三条第一項・刑法第六〇条

逮捕に至るまでの経緯について、妹は兄をドジとか馬鹿といって罵るのだが、最後の

致命的な失敗は、実は妹がやっているのだった。

一方通行の道路を交差点まで後退して停車すると、パトロール・カーから降りてきた警察官は免許証の提示を命じた。兄が応じられなかったため、ちよつとその交番まで来てくれということになり、妹も同行を求められた。素直に、はい、と答えたのはいいが、脱いで後部座席に置いてあつたジャケットをそのままにして行こうとしたのがいけなかった。

「あれ、誰の服？」

「わたしのですけど」

「寒いんじゃないの、着ていかないと」

若い警察官が親切にいつてくれるのを、

「いえ、いいんです」

さりげなく返したつもりだったが、顔は引きつっていたかもしれない。もう一人の古株の警察官がジロリと彼女を見つめて、どうして着ないの、と尋ねてきた。

まったく警察というのは、何でもかでも疑ってみるんですね。びっくりするくらいささいなことで、何かあるんじゃないか、何か隠しているんじゃないか、って。外はけっこう寒かったからジャケットを着ないのはおかしいといえはいえるんだけど、交番はす

ぐそこにあつたし、別にブラウス一枚でも震えるわけじゃなかったし。頭に來たのは、それを驚づかみにしたときね。軽くてあつたかい、とつても氣に入つてゐるジャケットだったから。人のものをそんなふうに掲つて失礼じゃない、つて叫びたかつたけど、声が出ないの。いいのを着てるねえ、とか何とかいいながら、ポケットを外側からポンポンと叩いたりしてゐるわけ。ドキッ。カサカサつて音がした。内ポケットに入れてたのね、あれを。これ、何ですか、つて。ちよつと中を拝見していいですか、だつて。それで一卷の終り。生きてゐる心地しなかつた。そのとき兄貴、何ていつたと思います？ 馬鹿だな、お前、だつて。

妹は、そんなふうに話して、再びあつてからかんと笑つた。東京拘置所の弁護士接見室である。一般の面会と異なり弁護人の接見は看守の付き添いを許してゐないため、被告人の真情が露骨に現われるのはいいのだが……。

中町は、少し心配になりかけていた。法廷でもこんな感じがやられたら、困つたことになる。兄のほうはもう一人の弁護士が担当していて、審理だけが同時に行なわれる予定だ。一所懸命なのは親のほうで、弁護人を国選に頼つてもよさそうな事件なのに、あえて私選にし、ぜがひでも刑を軽くしてほしいというのである。

「法廷では、ちゃんと、もう二度とやりませんといえるね」